未来はワタシたちを待っている
ESDで育てる児童生徒、教師、そして学校、地域社会

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

日本ユネスコ国内委員会 Japanese National Commission for UNESCO

第10回ユネスコスクール全国大会

持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会

未来はワタシたちを待っている
ESDで育てる児童生徒、教師、そして学校、地域社会

報告書

開催日：平成30年12月8日（土）
会　場：横浜市立みなとみらい本町小学校
主　催：文部科学省／日本ユネスコ国内委員会

文部科学省
平成30年度日本 / ユネスコパートナーシップ事業

第10回ユネスコスクール全国大会
持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会

報告書

平成30年12月8日（土）

横浜市立みなとみらい本町小学校

主催：文部科学省　日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
第10回ユネスコスクール全国大会横浜大会実行委員会
（横浜ESD推進コンソーシアム、神奈川県ユネスコスクール連絡協議会、
協力:横浜市教育委員会）
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

後援：外務省、環境省、横浜市、横浜市教育委員会、神奈川県教育委員会、横浜市立小学校長会、
横浜市中学校長会、横浜市立高等学校長会、横浜市立特別支援学校長会、
神奈川県ユネスコ連絡協議会、横浜ユネスコ協会、神奈川県小中学校校長会教頭会、
全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、
全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、一般社団法人日本私立大学連盟、
日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、
公益社団法人日本PTA全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivnet）、ESD活動支援センター、
関東地方ESD活動支援センター、日本ESD学会、株式会社教育新聞社

協力：オムロンヘルスケア株式会社、カシオ計算機株式会社、
コカ･コーラ ボトラーズジャパン株式会社、
ネスレ日本株式会社、株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー

目　次

◆総括 …… 6
◆実施概要 …… 7
◆告知 …… 8
◆大会日程 …… 9
◆開会式 …… 10
◆特別対談「未来をつくる人材育成のあり方を考える」 …… 12
◆パネルディスカッション
「ESDがつくるワタシたちの未来―ユネスコスクールで学び、育ち、そして、進む」 …… 20
◆分科会「喫緊の課題とESD」
【ワークショップ】
ユネスコスクールならではの気候変動アクション …… 29
ESD/SDGsを学ぶための教材をどう作成するか …… 29
ESDの視点で教員の働き方を見直そう …… 30
多文化理解・多文化共生をどう進めるか …… 30
学校と地域をどうつなげるか …… 31
【テーマ別交流研修会】
ユネスコスクールが行う海外連携・協働学習～海外と日本の事例から学ぶ～ …… 31
ホールスクールアプローチで学校をデザインしよう …… 32
ESDによる教育効果をどう測るか …… 32
どうやって周りを巻き込むか？～ ESDリーダー像を考える～ …… 33
ESDと防災 …… 33
横浜の児童生徒が考えるSDGs …… 34
◆ユネスコスクールによるポスター展示（実践報告） …… 35
◆ランチョンセッション（協力企業・団体による社会貢献活動紹介） …… 36
◆第９回ESD大賞表彰式 …… 38
◆第10回大会記念　ユネスコスクール／ ESD推進功労賞表彰式 …… 39
◆閉会式 …… 40
◆アンケート結果 …… 41
◆協力企業・展示団体一覧

総　　括

第10回ユネスコスクール全国大会―持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会（主催=文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、共催=NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム、第10回ユネスコスクール全国大会横浜大会実行委員会ほか、後援=外務省、環境省、横浜市、横浜市教育委員会、神奈川県教育委員会、教育新聞社ほか）は2018年12月８日、横浜市立みなとみらい本町小学校を会場に開かれた。全国から教員ら約800人が参加し、ESD大賞表彰式の他、ESD推進に向けた先進的な事例発表が繰り広げられた。

開会式では、浮島智子文部科学副大臣が挨拶。10年にわたるユネスコスクール全国大会の歴史を振り返り、「ESDに関するわが国の取組は好事例が数多くある。知見の共有や交流を通じてESDを一層進めてほしい」と呼び掛けた。

ユネスコ本部教育局平和と持続可能な開発部のチェ・スヒャン部長は「日本のユネスコスクールは世界に誇るべき取組をしている」とたたえ、「世界に向けて発信してほしい」と訴えた。

「未来をつくる人材育成のあり方を考える」と題した特別対談では、コーディネーターの杉村美紀氏（上智大学グローバル化推進担当副学長）が「主体的に考えるとはどういうことか」と問い掛け、宮内孝久氏（横浜市教育委員、神田外語大学学長）は「自分が何をやりたいかをいつも考えること。強い好奇心と情熱をもつことがビジネスの観点からも大切」と回答。安西祐一郎氏（日本ユネスコ国内委員会会長）が「学生や生徒たちがやりたいことをつかめずにいても、こちらから“こういうことがあるのでは”と提案することはせず、自分たちの力で目標を見つけるまで、教育現場は我慢が必要だ」と補足した。

パネルディスカッションでは「ESDがつくるワタシたちの未来―ユネスコスクールで学び、育ち、そして、進む」をテーマに、ユネスコスクールの卒業生６人が意見を交換した。出身高校がユネスコスクールで、現在は大阪府立高校に勤務する市橋菜津美教諭は「高校在学中に学び合いや対話の重要性を知った」と述べ、その経験を生かした現在の指導例に、多様な人々との交流学習を挙げた。小・中・高校とも防災教育に力を入れるユネスコスクールに通う宮城県気仙沼高校２年の伊藤夕妃さんは「防災への意識がいかに大切かを学んだ。将来は世界に向けて、ESDの視点から防災を広められる人になりたい」と語った。

11に分かれた分科会では、「ホールスクールアプローチで学校をデザインしよう」と題したワークショップや、SDGsをテーマに横浜市内の児童・生徒が議論する交流研修会が開かれた。特に交流研修会では、小学生から高校生までの４～５人が一つの班をつくり、計６班がそれぞれ「貧困問題に取り組むことがSDGsの第一歩だ」「ジェンダーの問題は社会全体の意識が変わらなければ解決しない」などと訴えた。

閉会式では、この10年においてESDの啓発普及に功績のあった教育関係者を対象に「第10回大会記念 ユネスコスクール/ESD推進功労賞」が授与された。

その他、全国のユネスコスクールの実践を発表するポスター展示も開かれ、10回という節目にあたり、これまでユネスコスクールが積みあげてきた成果やESDの教育的効果を示す記念すべき大会となった。

実　施　概　要

■日　時　平成30（2018）年12月８日（土）　受付９：15～　開会10：00／閉会17：15

■会　場　横浜市立みなとみらい本町小学校（横浜市西区高島一丁目２番３号）

■対　象　ユネスコスクール教員、一般幼小中高教員、都道府県・市区町村教育委員会、
ユネスコスクール協力者（企業、NGO／NPO、PTA、大学生、専門家など）、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）、一般参加者など

■参加者　総計 798名

■主　催　文部科学省　日本ユネスコ国内委員会

■共　催　ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラム
第10回ユネスコスクール全国大会横浜大会実行委員会（横浜市ESD推進コンソーシアム、
神奈川県ユネスコスクール連絡協議会、協力：横浜市教育委員会）
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

■後　援　外務省、環境省、横浜市、横浜市教育委員会、神奈川県教育委員会、
横浜市立小学校長会、横浜市中学校長会、横浜市立高等学校長会、横浜市立特別支援学校長会、
神奈川県ユネスコ連絡協議会、横浜ユネスコ協会、神奈川県小中学校校長会教頭会、
全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、
全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、一般社団法人日本私立大学連盟、
日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、
公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、一般社団法人国立大学協会、
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivnet）、ESD活動支援センター、
関東地方ESD活動支援センター、日本ESD学会、株式会社教育新聞社

■協　力　オムロンヘルスケア株式会社、カシオ計算機株式会社、
コカ･コーラ ボトラーズジャパン株式会社、ネスレ日本株式会社、
株式会社ユニクロ/株式会社ジーユー

告　　知

■チラシ

（表）

（裏）

■ポスター

大 会 日 程

時間	プ ロ グ ラ ム
09：15～	**受付**
10：00～10：30	**開会式** **挨拶** 浮島　智子（文部科学副大臣） 鯉渕　信也（横浜市教育長） チェ・スヒャン（ユネスコ本部教育局平和と持続可能な開発部部長）
10：30～11：30	**特別対談** 「未来をつくる人材育成のあり方を考える」 安西　祐一郎 （日本ユネスコ国内委員会会長、独立行政法人日本学術振興会顧問） 宮内　孝久 （横浜市教育委員、神田外語大学学長） コーディネーター：杉村　美紀 （日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長、上智大学副学長）
<<休憩　10分>>	
11：40～13：00	**パネルディスカッション** 「ESDがつくるワタシたちの未来―ユネスコスクールで学び、育ち、そして、進む」 ユネスコスクール卒業生6名 （気仙沼市・多摩市・横浜市・大阪市・奈良市・大牟田市） ファシリテーター：末吉　里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使） 総括：永田　佳之（聖心女子大学教授）
13：00～14：10	**ランチョンセッション（協力企業・団体による社会貢献活動の紹介）** 株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー コカ·コーラ ボトラーズジャパン株式会社 NPO法人いのちの教室／協賛 カシオ計算機株式会社
<<休憩・移動　15分>>	
14：25～16：20	**分科会** （ワークショップ＆テーマ別交流研修会）
<<休憩・移動　10分>>	
16：30～17：15	**第9回ESD大賞表彰式** **第10回大会記念　ユネスコスクール／ ESD推進功労賞表彰式** **閉会式** **挨拶** 木曽　功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）

開　会　式

～第10回ユネスコスクール全国大会／持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会開催に寄せて

司会進行：文部科学省国際統括官付専門官　徳留 丈士

◆文部科学副大臣　浮島 智子

第10回ユネスコスクール全国大会を、学校の先生方をはじめ、国内外から多くの関係者のご参加を得て、ここ、大好きな横浜の地で開催できることを大変うれしく思っている。開催にあたり多大なご協力をいただいた関係者の皆様に心より御礼申し上げたい。

私は、国づくりは人づくりだと考えている。子供たち一人ひとりに光を当て、個性を引き伸ばしていく教育、そして「誰ひとり置きざりにしない教育」の実現を目指している。

国連では、2030年までに誰ひとり取り残すことなく持続可能で多様性と包摂性のある社会を実現するため、持続可能な開発目標（SDGs）を策定して、様々な取組が行われている。私はこのSDGsの達成をとても大切なことと考えている。

中でも、持続可能な社会の担い手の育成を目指すESDは、「全てのSDGsの実現の鍵である」と国連決議でうたわれており、文部科学省としては、SDGsの17全ての目標の達成を目指して、ESDを積極的に推進している。

日本のユネスコスクールは、ESDの推進拠点として、地域や世界とつながり、それぞれの学校が特色ある様々な取組を展開している。日本のユネスコスクールの数は今年1,100校を超え、この全国大会は記念すべき第10回を迎えた。本大会を、全国のESDの好事例を学ぶ場、全国の教員やESD関係者との知見の共有や交流の場として、大いに活用していただきたい。

本大会で参加者の皆様が多くのものを得て、ユネスコスクールが、ユース世代をはじめ、地域の様々な関係者と深くつながり、更に活動を充実していくことを祈念している。

◆横浜市教育長　鯉渕 信也

第10回ユネスコスクール全国大会が、盛大に開催されることを、心よりお慶び申し上げたい。この４月に開校したばかりのみなとみらい本町小学校にお迎えできることを大変光栄に思う。

横浜は、今から約160年前の開港を契機に、内外から様々な文化と技術を取り入れ発展してきた。近年では、地球温暖化や超高齢社会など、世界的な課題への対応にも積極的に取り組み、今年の６月には、国から「SDGs未来都市」に選定された。国際社会の共通目標であるSDGsの達成に向けて、「Zero Carbon Yokohama」など意欲的な目標を掲げ、経済や文化芸術による新たな価値・賑わいを創出し続ける都市の実現を目指している。

こうした中で、教育については、「教育が全てのSDGsの基礎」であり、「全てのSDGsが教育に期待している」と言われ、その果たす役割は大変大きなものがあると考えている。横浜市の教育委員会においても、28年度から、文部科学省の補助をいただき、市長部局をはじめ、大学、NPO、NGO、企業などとESD推進コンソーシアムを組織し、ESDの普及・啓発に取り組んでいる。

本日の会場となっている、ここ、みなとみらい本町小学校でも、SDGsの17の目標から、すべての学級がそれぞれの学級目標を選ぶなど、ESDを意識した学校経営を行っている。

この２月には、横浜の教育が育む力として、「グローバルな視野を持ち、持続可能な社会の実現に向けて行動する力」を掲げる「横浜教育ビジョン2030」を策定した。加えて、現在策定を進めている「第３期横浜市教育振興基本計画」でも、基本姿勢として「持続可能な学校への変革」を挙げ、SDGsとの関係性を意識した教育活動の展開を進めていくこととしている。

また、持続可能な社会を作っていくためには、地球規模の課題に取り組むネットワークづくりが大切であると言われている。こうして、縁あって、ここ横浜に集った皆さんには、この機会に、大いに交流を深めていただきたい。この場が、お互いをよく知り、より理解を深めるスタート地点となれば、これほどうれしいことはない。

最後に、ご来場の皆様のますますのご活躍、ご健勝を心からお祈りし、ご挨拶とさせていただきたい。

◆ユネスコ本部教育局平和と持続可能な開発部部長　チェ・スヒャン

ユネスコ教育担当事務局長補のStefania Gianniniに代わり、第10回全国大会の開催に、お祝い申し上げたい。また、ユネスコスクールは今年発足65年である。この２つの重要な節目を皆様と共に祝うことができ、光栄に思う。

日本には、世界で最も多くの加盟校があり、ESDの分野で数々の素晴らしい活動が行われてきたと聞いた。私たちが暮らしたいと思える世界を実現するために、皆様はSDGsを通じて大きく貢献されている。

ユネスコの近況は、まず、ナショナルコーディネーターのためのガイドブック最新版が出た。ユネスコスクールの新しい組織の枠組みや、ユネスコスクール認定基準、申請要件の変更点などが記されている。

また、ユネスコスクール加盟校の重要な活動テーマである、地球市民教育、平和のための文化、非暴力、異文化理解、文化の多様性と人類の遺産、持続可能な開発とライフスタイルについても説明している。

このガイドブックと共に、ユネスコスクールのためのオンラインツール「OTA」も導入した。OTAによって世界のユネスコスクールが国境を越えて、交流できる。また、経験や情報を共有することで、外国のユネスコスクールと合同プロジェクトを企画できる。

新しいガイドブックとOTAの詳しい内容をまだご存知でない方は、是非ご覧になっていただきたい。日本のユネスコスクールと世界のユネスコスクールの間で、新しい創造性溢れるアイデアの交流が促進されることを期待している。

私の挨拶を締めくくる前に、日本でユネスコスクールを支えてこられた日本ユネスコ国内委員会に心から御礼申し上げたい。国内委員会のリーダーシップはほかの国々の模範である。また、日本政府のご支援のおかげで、ユネスコは他国のユネスコスクールでも展開可能なプロジェクトを始めることができた。各国のユネスコスクールが互いに協力できるように、これからも日本政府のご協力をお願いしたい。

最後に、アインシュタインの次の言葉を紹介したい。「私には特別な才能などない。あるのは旺盛な好奇心だけだ」。皆様のリーダーシップの下、生徒たちの好奇心が呼び覚まされ、学校が自由な発想を可能にする場となることを期待している。

特別対談　～未来をつくる人材育成のあり方を考える

コーディネーター：杉村 美紀
（日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長、
上智大学グローバル化推進担当副学長、
総合人間科学部教育学科教授）

持続可能な開発目標（SDGs）の達成をめざす2030年。さらにその先、社会は急激な変化を遂げていく。そのような社会を生き抜くためには、どのような資質・能力の育成が必要なのか。初等中等教育及び高等教育の課題を踏まえたこれからの教育改革、その中におけるESDの位置付けや重要性とは何か、また今後の社会を見通した人材育成の課題とは何か。ユネスコスクール、ESD/SDGs関係者への期待を語る。

【登壇者】
◆安西 祐一郎
（日本ユネスコ国内委員会会長、独立行政法人日本学術振興会顧問、学術情報分析センター所長）
◆宮内 孝久
（横浜市教育委員、神田外語大学学長、国連UNHCR協会理事、元三菱商事株式会社代表取締役副社長）

【対談内容】
◆安西氏

これまでユネスコスクールの活動を長期にわたり拝見し、実際に、こうしたユネスコスクールの活動が今日あるというのは本当に世界に誇るべきことだと感じている。客観的に見ても皆様が誇りにすべきことだと思うので、本日は第一にそのことを申し上げておきたい。その上で、未来を作り、10年、20年後の社会を担っていく子供、児童･生徒･学生たちにどのような人になってほしいかを手短にお話ししたいが、そのためには未来の社会がどうなるのかがとても重要になる。次の３点について私の考えをご説明したい。

１点目は国内の人口減少について。特に若年人口の減少が顕著で、例えば今後20～30年に高校を卒業する18歳前後の人口が半分近くに減少するが、こうした事態は明治以来ほとんど経験したことがなかった。そして２点目は世界について。世界情勢が激変し将来が見通せず、2030～2040年にどうなるのか全く予測がつかない。３点目は技術革新、いわゆるデジタル技術について。技術だから影響は別物ということでは全くない。政治や外交。例えば、民主主義にまでデジタルの影響が及び、選挙を左右するような時代になっている。

この国内、世界、デジタル化という３つの変化が非常に大きい。その上で、子供たちがどういう人になってほしいかと言えば、やはり主体的にさまざまな人々と協力し合って、人の気持ちを感じながら自分の言葉で人に表現していくことができる人。単にがむしゃらに突進していけば良いということではなく、人の気持ち、そしていろいろな文化をもった人たちの気持ちを理解しながら自分を表現していくことが大事であろう。多様な背景をもった人たちが幸せに暮らしていくことができる社会を支えリードしていく。そういう人間になってほしい。

◆宮内氏

私たちは世の中のことをほとんど分かっていない。物事というのは、自分が知っていること以外のことは分からないわけである。自然界や社会、世の中のことについて、自分が知っていることはほんのわずかで、正しいか、正しくないかという判断は人によって異なる。人種、宗教、文化によっても異なる。日本の死刑制度に対する批判は世界では数多く、日本人が鯨を食べることが残酷だと非難する国々も数多い。韓国では犬を食べる習慣があり可哀想だという人もいる。つい最近、サウジアラビアで女性の車の運転が解禁されたが、サウジの女性たちは必ずしも歓迎していない。

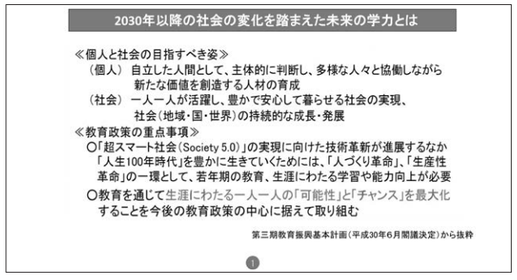
また、私が子供の頃、理想的な家庭像として、男性が働き女性は家を守るという役割分担があり「良妻賢母」とよく言われたが、今は死語になっている。アメリカ南部に行くとトイレが白人用、黒人用と分かれていたが、今世紀になってバラク・オバマが大統領になった。また、反社会性のシンボルである入れ墨が今、若者の間ではタトゥーといってオシャレの象徴になっている、というように価値観は日々変わっていくわけである。

プラスチックは最近、マイクロプラスチック問題で悪いものの代表のように言われるが、30年や50年前は繁栄の象徴だった。例えば、鉄や金属、木材などの天然素材、また綿や羊毛などを使わずに、繊維やさまざまな建築材料を作れる優れた素材であったが、対処を間違えると環境を破壊する諸悪の根源と言われるようになっていく。自然界、社会、人間と、この世の中というのは分からないことだらけである。

考え方も多様で正しいとか正しくないかが問題ではない。私は40年間ビジネスマンとして70～80カ国を歩いてきたが、その実感は世界中が大変な生存競争にあるということ。ビジネスというのは、時代や地域のニーズに合わせてモノやサービスを提供し感謝され、その対価をもらうことだと思うが、その中で勝ち残っていかなければいけない。どうやったら勝ち残れるかというと、安西先生が指摘されたように、自分の言葉で自分で考える人間が勝ち残れる人間であり、人との衝突をできるだけ避けることだろう。私は強い好奇心と情熱、コミュニケーション能力、そして考える力、クリティカルシンキング（批判的思考力）が必要だと思っている。どうやって好奇心をもち、コミュニケーション能力を鍛えるか。そして深く考えること。これが未来の学力だと確信している。

コーディネーター：
宮内先生が指摘された「批判的思考力」に関する二人のお考えをお聞かせいただきたい。

◆安西氏



参加者の大半が先生方であることから申し上げるとすれば、「批判的思考とはこういうものだ」「こういう風に教えなければいけない」と考えてしまうことが多いのではないかと推察するが、大事なことは、例えばこのスライドを見た時に「おかしい」と感じる点がある、という批判的思考力だと思う。これが第３期教育振興基本計画で閣議決定されたものだと聞くと「そうなんだ」「これをやらなきゃいけない」と思いがちだが、この問題というのもかなり抽象的である。従って、「どこが間違っているか」というより「これを一体どうするか」ということ。例えば、ここに「生涯にわたる一人ひとりの可能性とチャ

ンスを最大化すること」との記載があるが、「一人ひとりの可能性とチャンスを最大化するとは一体どうやったらできるのか」「最大化するとはどういうことか」と考える。子供たちに「考えろ」と言うよりも、まず私たち一人ひとりがそういう物の見方をすることが大事だということである。

批判的思考力について、この場で簡単に話すことはできないが、例えば、宮内学長のお話にあったように社会あるいは世界では本当にさまざまな問題がある。特に、このスライドの中には経済界に関する記載が全くないが、生徒の多くは将来、経済界に進むであろう。この「最大化する」の意味は、経済を知らなければ本当には分からないと思う。ここであれこれ言っても答えはない。そうして考えると、このスライド１枚見てもいろいろなことが書かれていないことが分かる。

◆宮内氏

私が考える批判的思考力というのは、「先生の言うことを鵜呑みにしない生徒・児童を育てること」ではないかと思う。教科書や新聞、本を考えながら読む。一人で考えると飽きるというか思考が止まってしまうから、グループ学習や先輩との会話がある。そういうことが批判的思考力には非常に重要だと考えている。

コーディネーター：

宮内先生が学長を務めていらっしゃる神田外語大学のホームページで、「おもしろおかしく元気よく。学びを楽しもう」という温かい学長メッセージを拝見した。安西先生が指摘された「主体的な考え」についてのお考えをお聞かせいただきたい。

◆宮内氏

先ほど、ビジネスマンの観点からも強い好奇心と情熱をもってもらいたいと申し上げた。これは先述のアインシュタインの言葉通りである。この「好奇心」は表現を変えれば､「面白いことをやる」ということ。そして、「良い仕事をしたい」「良い学校を作りたい」「良い国を作りたい」「良い世界を作りたい」といったあるべき姿や「自分が何をやりたいか」をいつも考えることではないか。また､「テニスで勝ちたい」「水泳で一番になりたい」という強い気持ちやパッションがとても大事だと思う。そして、そうした好奇心をさらに強める多様性というものを学ぶ。すると、また新たなパッションが高まる。これを「多様性と戯れる」と表現している。「勉強」というと強いられる感じがするが、遊び感覚で「未来への学び」を楽しむ、あまり恐い顔をせずに楽しむことが大事だと思っている。

◆安西氏

私は高校と大学で、一人ひとりの学生や生徒が自分の目標をもつための授業を行っている。この授業では自分が一番やりたいことを自分の目標にして進めるが、なかなか自分の目標をつかめない学生が多い。「目標と言われても、何をしたらいいか分からない」と言う。その際、自分に湧き上がってくるものがないと本当の自分の目標にはならないので、こちらから「こういうことがあるのでは?」とは言わないようにしている。

自分の経験から言えば、学校現場ではある程度の我慢が必要だと思う。一人ひとりの生徒や学生が、小さくても良いから「こういうことをやりたい」というものを自分でつかむまで、どうしたらできるのか。教育の現場の現実では、そこまで待てないと思うので理想論ではあるが、自分の目標をもつことが大事ではないか。

◆宮内氏

自分の目標をもつことは本当に難しく、皆様方も日々悩んでおられると思う。その時に、大人というのは上から目線で「あれをしなさい」「これをしなさい」と指導したがるが、ティーチングではなく、後ろから背中を押すサジェスチョンであったり、議論を教えるのではなく、ファシリテートというか、頭を活性化させること。そして、自分で腑に落ちて「これは面白い」「興味がある」と思うと、力が出るのだと思う。

コーディネーター：

ただ今のお話はまさにESDが提言する「主体的な学び」に直結すると思うが、そうなると学校のどんなプログラムやカリキュラム、引き出しを使って、自分の目標を確立していけばいいのか。2020年には学習指導要領が変わるが、その辺りをお聞かせいただきたい。

◆安西氏

難しい問題だが先ほどの続きで申し上げると、目標を立てた後も１週間あるいは１カ月、１年という期間に何らかのステップを踏んでその道を進めていく。その際に達成感をもってもらいたいと思っている。

大事なことは、私たちや生徒の情報量は少ないので情報をどう集めるのかという点である。人に聞く必要や本で読む必要があるかもしれないが、期限もあり、それほど待ってもいられない。そのため情報の集め方は、ある程度教えていく必要がある。また、その情報が正確かどうかも分からない。例えば、ウィキペディアの情報を使うとしたらセカンドオピニオンをとる必要があるとか、そうした手段は積極的に教えるようにしている。自分の経験で申し上げたが、情報収集には期限があり、収集方法は決まっていることなので、そのトレーニングが大事ではないかと思う。

◆宮内氏

情報のとり方はトレーニングだと思う。そのトレーニングの一つはコミュニケーション。英語で「読み」だと言われる。読み、書き、話す、これがコミュニケーションではないか。相手の話を聞き、本を読み、書いて、自分の頭を整理する、考えをまとめる、相手の言うことを理解する。そこで妥協があったり、驚きがあったり、発見があったりする。それがコミュニケーションになる。言い放したり、「自分の意見が正しい」「俺だけが正しい」と思うと、コミュニケーションをとれなくなる。そうしたコミュニケーションの仕方もトレーニングかと思う。昨今、分断の時代と言われ、グローバル化の中で取り残される人も増えているが、こういった対立を乗り越えて良い世界を作りたい。そのための力がコミュニケーション力ではないかと考えている。

SDGsのテーマについては17の目標を2030年までに解決しなければいけない。解決は無理でも考えて「達成しよう」と思わなければいけない。意志が世の中を変える原動力になる。「自分だけが幸せになればいい」「自分だけが豊かであればいい」ということでは幸せにはなれないだろう。

私はUNHCR国連難民高等弁務官事務所のお手伝いで難民救済の活動をしているが、知人からは「偽善者だ」と言われる。毎日､大勢の子供や難民が死んでいくわけだが､「１～２万円の寄付で救えるわけがない。焼石に水だ」「日本人は毎日美味しいものばかり食べて500円寄付するが、偽善の世界だ」などと非難される。もちろんこれが根本解決になるわけではないが、一人ひとりが世の中を考えるきっかけにはなる。生徒・児童にそうした材料、考えるきっかけを与えることで、頭を活性化させることができる。

SDGsの17の目標というのはアクティブラーニングの教材として最適で、アクティブラーニングも先生方のお考えで遊び感覚でやったら良いのではないか。あまり真面目に恐い顔で「貧困をなくそう」「戦争をなくそう」と言うと行き詰まるので、生活者として一人ひとりができる範囲で考えようということで、児童生徒が自分に合ったSDGsのテーマを一つずつ選び、自分で考えて教科書を作ってもらう。これは大きなヒントになると思う。

◆安西氏

高校の修学旅行などで先生が引率して生徒がグループで見学・訪問し、さまざまなコミュニケーションを行うという活動が増えている。私のところにも問い合わせがあり時間が合えばお引き受けしている。訪問を受けた際に、生徒が楽しそうに次々と質問してくるグループがある一方、シーンとしてしまうグループもある。正直なところかなり温度差がある。

この違いがどこから来るのかと言うと、一つは生徒がもつ情報の部分ではないかと考えている。訪問先について生徒がどの程度知っていて前向きに勉強しているかということ。もう一つは、引率の先生と生徒間のコミュニケーションがとれているか、ということがあるのではないか。言い過ぎであれば申し訳ないが、そのように見える。苦労は多いと思うが、預かっている生徒とのコミュニケーションというのは、気持ちを察すること、生徒一人ひとりがどういう関心・目標をもっているのかを推察することが非常に大事だと思える。

◆宮内氏

保有する情報量によって全く違ってくると思うが、情報を与えても吸収してくれなければ情報にはならない。従って、そこに関心や好奇心をもつきっかけを与え、発見させる場が教育ではないかと考えている。

少し話は逸れるが、道徳の時間に22の徳目を教えるエピソードが書かれた教科書がある。その22の徳目を、例えばSDGsの目標に置き換えてみる。難民や平和の問題というのは考えやすいが、例えば成長と環境、先ほどはプラスチックの話をしたが、ケミカル（化学）の問題もある。ケミカルというのはアラビア語でアルケミクスまたはアルケマと言うが、ケミカルによって空気中の窒素を固定してアンモニアに変え、尿素にして化学肥料に変える。100年前は15億だった世界人口が今は75億に拡大している中で、この化学肥料によって食料供給が満たされ飢えが徐々に減っている。ポリエステル繊維ができたから綿花栽培による干ばつがなくなってくる…というように、私たちは化学の恩恵を被っているわけだが、「農薬を使いすぎる」「水道に良くないのではないか」として否定すると、多くの人が疫病で死んでしまうわけである。従って、常に成長と科学技術の発展と、それよって失われていくもののバランス、良いとか悪いではなく最高のバランスを作っていかなければいけない。

ビジネスというのは常に裏も表もある。世の中というのはやはり斜めから見た場合と、下から見た場合では異なるわけで、そこに重大な問題が隠されているかもしれない。そういった一つひとつの問題・課題を小さい時から常に考えて、人の言っていることを鵜呑みにしない批判的思考力。これが未来への学びになるのではないか。

コーディネーター：

「論理的思考力」に関するお考えがあればお聞かせいただきたい。

◆宮内氏

議論というのは非常に難しく、戦いかもしれない。ディベートとディスカッションは異なる。ディベートは相手を言い負かさなければいけない型であり、論理であり、その論理を支える材料を自分で用意する。外交交渉はそちらに入るだろう。学校での議論には論理もあるが、論理的にきちっと筋道立てたものを考えなければいけない。これは自分を守ることにもなるし、社会を守ることにもなる。これを訓練するのが大学と考えている。

質問の趣旨から逸れるが、今後ますますAIが進化する。AIというのは非常に論理的なものと統計によって推論していくわけである。例えば、画像診断がある。心臓外科医は自分の目でレントゲン写真を見るよりも、高度な精密機械やAIによって問題個所を発見してもらった方が発見の確率が高いのではないか…というように、AIによって解決できる問題が非常に増えている。簡単なロジックはAIで解決できるのではないか。

しかし、「感性」「感じる」「感がいい」「先を見る」などはAIが最も苦手とするものだと思う。従って論理的思考力を鍛えるが、その次にあるのは何か。やはり音楽を聴いたり、詩を読んだり、映画を観たりといった感性。きれいなものをきれいと感じるなどの感性がますます必要になる。感受性についてはSDGsでさまざまなテーマがあり、SDGsのアイテムは見る度によくできていると感心する。

道徳教育に関して申し上げたが、これが、例えば環境問題、政治問題という話になるとサイエンスの話であり、社会科学の話であり、そして感性を必要とするから、音楽やアーツの話になる。要は理科系とか文化系と言うのを止めようということ。学ぶことは神羅万象で非常に面白い。理科系・文科系として見ることで、その面白さを子供たちからもぎ取っているのではないか。

◆安西氏

論理と感性は全く別々のものではなく、やはり相携えて人間としての教養であり、世界で仕事や生活をしていくには両方が必要になることは明らかである。

私は出張することも多く、中国やインド、韓国などの学生に会うことも多いが、ESDやSDGsなどのさまざまな活動をする中で、日本の若者にもう少し持っていてほしい力がある。それは、①論旨を明快に考え、②相手の立場に立ち、あるいは相手のことを感じながら考え、③論旨明快に言葉で表現する、ということ。日本国内で、仲間同士で、例えば一つの学校で暮らしている分にはあまり問題にならないが、いろいろな文化や背景の人たちと一緒に仕事をするようになると、その３つを合わせたものがどうしても問われてくる。論旨明快に表現する上では言葉を選ばないといけない。相手や状況によって言葉遣いを選んでいかないとコミュニケーションがとれない。そのトレーニングが、特に日本の学生には必要になると感じている。

文系と理系の話については、内閣府の人工知能戦略会議の議長をしており、その中でも文系・理系の壁を破っていかなければいけないという議論がかなり出ている。これをどう進めていくのか。現在のいわゆる受験勉強では高校２年生頃に国立理系や私立文系などに分かれていく。そうした点から考え直していかなければいけないので簡単ではないが、日本では他国に比べても文系コースと理系コースが分かれすぎており、企業の採用も徐々に変わってきたものの事務職採用と技術職採用で分けていた時代が長く続いていた。もっと柔軟性をもって柔軟な人の力というものを柔軟に見ていく。あるいは、そういう時代が来ている。そうした点にご注意いただければと思う。

コーディネーター：

誰かと繋がり、あるいは協働して学ぶことで一つの大切な学びを作る。全国の先生方も進めておられるが、インフラと教育をどう生かしていけばいいのかお聞かせいただきたい。

◆宮内氏

学校現場においても連携・協働などさまざまな形があると思うが、私たちはどうしても自分の世界だけに閉じこもってしまいがちになる。タコツボというのは、タコが壺の中に入って外を見なくなることだが、私たちも外の世界を見なくなり満足して、「うちの学校」「うちの会社」と言って、それぞれの組織が小さな社会「うち」を形成しがちである。これが良くない。役所も会社もタテ社会が染みついて、なかなか脱却できない。

これを打破するには外との連携が必要である。日本人ならば外国人との交流が必要ではないか。スポーツや留学などいろいろな機会を与えたい。ということで、私は高校生や中学生の頃から留学に行くとか、さまざまな機会に海外と接触するチャンスをもち、これを意識的に作ることがとても大事だと考えている。但し、物理的には時間もないし容易でない。そうした時に、オンラインで連携可能なスカイプなどの無料サービスを使えば、自分の考えた作品や数式などをアフリカの人とも無料で情報交換できるのだか

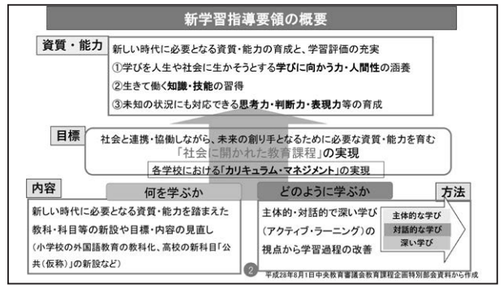
ら、ICT教育をもっと活発にしたい。寝転がってiPadを持ちながら誰かと数学のディスカッションをするというように、遊び感覚でやればもっと頭も回るようになる。このタテ社会のタコツボを打ち破るために、iPadやスマホはとても良いツールだと思っている。

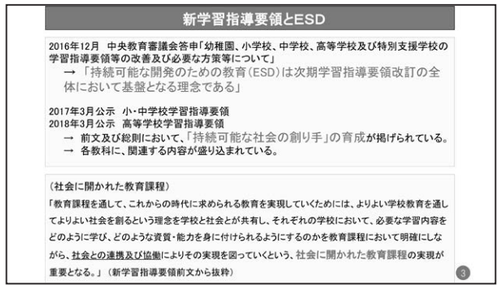
◆安西氏

学習指導要領が新しくなる2020年度から、小学校の総合的な学習の時間が総合的な探究の時間になると書いてある。そうした点を見直して、ESDやSDGsなどで言われているような社会的に非常に大きな世界的課題を絞り込み、生徒が自分事として関われるようなテーマを設定して自分たちが解決策を考えていく。そうした手立てやカリキュラムの作り方がどうしても必要になる。

その中で今、アクティブラーニングが強調され、自由な発想なら何でも考えて良く「とにかく何でもやってみよう」という方法と、従来の方法がある。もちろん科目によって異なるが、その科目のことしかやらないとか、総合的な探究の時間で例えばESDやSDGsしか使わないということだと、本格的な教育改革にならないのではないかと気になっている。各教科がそれぞれ縦割りのような点があるので、そこにユネスコスクールの活動やESDも手本に、改革を横串で進めていけるような、本当に社会に合った教育課程をどうしたら進めていけるのか。答えはまだ出ていないが、どうやったら私たちがリンクしていけるかが課題になっていると思っている。

一例を紹介すると、日本ユネスコ国内委員会前会長の田村先生が理事長をされている渋谷教育学園が昨年「世界高校生水会議」を主催したところ、世界中から高校生が集まり、素晴らしい国際会議になった。このように、例えば水の問題一つとってもさまざまな教科、科目が関わってくる。そうしたことも一つのきっかけになるのではないか。





コーディネーター：

最後に、自然や社会に開かれたカリキュラムであり、垣根を越えて作られたESDに期待するメッセージを一言ずつお願いしたい。

◆宮内氏

まず、学校の先生方がSDGsの一つひとつを実現するために何をしたらいいのか、何ができるのかを考えて議論していただいて、児童生徒をリードする、もしくは背中を押してあげる、ヒントを与えるということ。どうしたらこの分断・対立の時代に、成長と環境の問題や諸矛盾を乗り越えることができるか、私たちが真剣に考えること。これが何よりも始まりではないか。

そして、学習指導要領にいろいろ記載はあるが、それを鵜呑みにして「やらなければいけない」と思うのではなく、その精神を感じて、もしくは批判して、自分の教育思想を実現すること。先生方にも批判的思考力がある。

「皆でより良い社会を作ろう」ということで、上からの指示に従って行動する社会を変えていきたい。日本では大宝律令の時代から今に至るまで常に中央から指示がある一方で、地方や組織が自発的に発展してきた社会であったことも事実である。両方からのせめぎ合いで良い共同体ができることを期待している。

◆安西氏

最初に申し上げた通り、ユネスコスクールの活動は本当に世界に誇れる活動である。毎年開催している全国大会で、このことを改めて共有していただければ有難い。これを申し上げるのは、ESDやSDGsの活動が新しい学習指導要領の理念の大枠となっているためである。従って、ESDを進めておられる先生も多いと思うが、新しい学習指導要領の理念が自分たちの進めてきた方向に合致していることを共有することがとても大事だと思う。

その上で、今後、例えば教員養成と言われてさまざまな事柄が求められることもあるわけだが、それに対して発言していく。あるいは、先ほど申し上げた通り、国家を超えて社会に開かれた教育が日本に根付き、そこから育った子供たちや学生、社会人がこれからの新しい時代を担っていく。また、多様な人たちと協力し合いながら、主体性をもってクリエイティブにこれからの時代を切り開いていく人たちが育成される。ざっくりとだが、そうしたことを思い描いている。

本日の内容をぜひ共有いただきたい。政策側に具体的に押さえていただきたい点も多いが、各所で進めていく必要があると思う。ここでは是非、私たちがその中心になりうる歴史を作っていきたい。

コーディネーター：

本日お集まりいただいた全国の関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、両先生からご意見を頂戴できたことに心より感謝申し上げたい。日々の努力がまさに持続可能な社会づくり、そして人材を育てる力になり、今後もそれぞれが実践や交流を通して、そうした力を蓄積していかれることを期待する。

パネルディスカッション

「ESDがつくるワタシたちの未来～ユネスコスクールで学び、育ち、そして、進む」

ファシリテーター：末吉 里花
（日本ユネスコ国内委員会広報大使、
一般社団法人エシカル協会代表理事）

本日は多くの方にお越しいただき感謝申し上げたい。

私は今年５月に日本ユネスコ国内委員会広報大使に任命され、本日のパネルディスカッションの進行役を務めさせていただくこととなった。

このパネルディスカッションでは、ESDで積極的に交流している地域のユネスコスクール卒業生６名の方々に、そこで学んできたこと、あるいは今に活かされていることを語っていただき、それを共有することで、今後のユネスコスクールが元気になるような場にしていきたい。第10回大会で初めて生徒の方々の経験談を伺える機会が設けられたということで、大変貴重な場だと思っている。

まず、ご登壇いただくユネスコスクール卒業生６名と総括をお願いする聖心女子大学文学部教育学科教授永田佳之先生をご紹介して、パネルディスカッションを進めていきたい。

1. 登壇者紹介

【登壇者】
◆宮城県気仙沼市
伊藤 夕妃（宮城県気仙沼高等学校２年）
～出身ユネスコスクール：宮城県気仙沼市立中井小学校、気仙沼市立唐桑中学校
◆東京都多摩市
縄手 円（東京都立小金井北高等学校１年）
～出身ユネスコスクール：東京都多摩市立多摩第一小学校、多摩市立多摩中学校
◆神奈川県横浜市
宮崎 悠紀（東洋英和女学院大学 国際コミュニケーション学科２年）
～出身ユネスコスクール：神奈川県横浜市立永田台小学校
◆大阪府大阪市
市橋 菜津美（大阪府立能勢高等学校教諭 勤務２年目）
～出身ユネスコスクール：大阪府立松原高等学校
◆奈良県奈良市
嶋田 智沙恵（奈良教育大学 数学教育専修１年）
～出身ユネスコスクール：奈良教育大学附属中学校
◆福岡県大牟田市
中川原 沙月（梅光学院大学 子ども部子ども未来学科４年）
～出身ユネスコスクール：福岡県大牟田市立白光中学校

【総括】
永田 佳之（聖心女子大学文学部教育学科教授）

このパネルディスカッションを楽しみにしていた。皆さんを横浜にお迎えし、どうしたらユネスコスクールらしい大会になるかと考えていた。若者が主役なので、若者が舞台に上がり、若者に話してもらうことが大切だと思っている。この場にいられて大変嬉しい。

2.パネルディスカッション概要

ファシリテーター：

まず、皆さんはユネスコスクールが出身校ということなので、自分が通った学校でどんなことを学んだか、あるいはどんなことが楽しく、どんなことが難しかったか。先生との関わり、友達との出会い、あるいは地域の方々との出会いかもしれない。いろいろあると思うが、学んできたことや思い出に残っていることをぜひ共有いただきたい。

最初に、伊藤さんからお願いしたい。

◆伊藤さん（宮城県気仙沼高等学校2年）

私は小学校、中学校、高校と、ずっとユネスコスクールで学ばせていただいている。気仙沼ということで、小学校と中学校は海や自然豊かな環境の中にあった。また、震災を機に防災を意識し、防災に注力して学ぶことができて感謝している。

一番印象に残っている活動は、中学３年生の時の街づくりの活動で、「皆で地域を盛り上げるドラマを作ろう」というものだ。その活動に至る経緯には、中学校のある先生との出会いがあり、その出会いから地域づくりに興味をもつようになった。活動では、チームを組んで動画内容やカメラワークについて考えた。同じ地域に住み、同じ学校に通っている私たちだが、価値観や作りたい動画の意見が異なるなど常に衝突はあった。しかし、先生方から「自分たちで考えて自由にやっていいよ」と言われたことが励みになり、主体的に考えられて楽しかった。動画の内容は、地元が嫌いな男子中学生が夢の中で漁師やいろいろな人に会って話を聞くことで地元に対する見方を変え、最終的には「地元が好きだ」と感じるようになるというものだ。震災を経験しなかったら、できなかった経験ではないかと感じている。

◆永田先生

伊藤さんは昔、東京や横浜に憧れていたと伺ったが。

◆伊藤さん

はい。今回、横浜に来られてとても嬉しく思っている。イルミネーションが美しく、電車は数分おきに走り、私の住んでいる地域では考えられない。子供の頃から憧れがあった。

◆永田先生

そうした価値観を抱いている伊藤さんが、地元が大好きだと言われる。その動画も、地域の男子学生が学びを通して地域の良さを再発見するということだと思う。行動変容がESDの成果だと言われているが、まさにそれを証明していると思った。

ファシリテーター：
　伊藤さん、ありがとう（拍手）
　続いて、縄手さん。ユネスコスクールにどんな思い出があるか伺いたい。

◆縄手さん（東京都立小金井北高等学校1年）

　私は小学校のとき、エネルギーについて力を入れて学んだ。そして、クラスみんなで考え、実際に多摩市と多摩市の電力会社に提案をしたことが二つある。一つは電力の地産地消を目指すことだ。授業で色々な発電方法を学び、自然エネルギーの中で太陽光発電が一番エネルギーが大きいのではないかと考えた。そこで実際に、太陽光発電でどれ位の電力を賄えるか具体的な数値を出していった。
　もう一つは、発電と観光について提案した。地域を変えるためには、一人ひとりの考えを変えていくことが大事だと思い、発電と観光を繋げることで、地元の人に発電に興味を持ってもらおうと考えたのが始まりだ。発電ゴーカートなど、自分で発電できるアトラクションを考えた。

ファシリテーター：
　エネルギーのことを地域全体で考えていくというのは非常に大事なことで、凄い取組だと思う。

◆永田先生
　世界的にはそうした事例もあるだろうが、多摩市で小学生が、企業や市の環境課と共に取り組んだ点が注目される。小学生の時にそうした経験をされたことは、非常にアクション志向であり、ESDらしい学びになったと思う。

ファシリテーター：
　小学生による新鮮な取組で、地域も子供たちの姿勢を受け止めないといけない。縄手さん、ありがとう（拍手）。
　続いて、大学生の宮崎さんに伺いたい。

◆宮崎さん（東洋英和女学院大学 国際コミュニケーション学科2年）

　私は永田台小学校６年生の時に、学校の窓から歩きタバコをして川にポイ捨てをしている人を見た。思わず「ダメ」と大声で叫んだが声は届かなかった。住田校長先生が常に「話したいことがあれば、いつでも校長室の扉を叩いてください」と仰っていたので、思わず校長室の扉を叩いた。小学生だし相手にしてもらえないだろうと思ったが、どうしても伝えたかったので話してみたところ、校長先生から「自分の考えと同じ人を見つけてみては？」と提案された。そこで、一人だけでなく学年の皆にも一緒にこの問題について考えてほしいと思い、これが学年の仲間と「一緒に考えたい」「環境保護活動をしたい」という動機になった。
　活動を進めるには、神奈川県と横浜市南区という管轄の違いで、役所に許可をもらう必要があった。私たちは、次世代を育てるために時間を割いてくれる大人に恵まれた環境にあり、ポイ捨てを禁止する看板を設置することができた。看板が設置されたことで環境に対する皆の意識が高まり、私たちの活動は終了したと思ったが、校長先生から「看板が設置されてから、この活動をどう進めていくかを考えないといけない」というお言葉をいただいた。
　私は校長先生が一人の小学生にそういう言葉をくれたことに感動し、私も中学生・高校生になったら、下級生に何かしてあげたいと思うようになった。単に看板を設置して、環境について考え勉強することができたという経験で終わるだけでなく、自分たちの未来に、そして子供たちにも「自分ができることをしてあげられるようになりたい」という前向きな気持ちをもてるようになったと思う。

ファシリテーター：
　素晴らしい地域貢献だと思う。こうした先生との出会いは、ユネスコスクールの一つの大きな魅力であり、凄いことだと感じる。

◆永田先生
　住田先生は校長室の扉を常に開けて、まさにそうした姿勢で居られる。「味方になってくれる大人がこの学校にはいる」という意識を子供たちがもてることが大事だと思った。

ファシリテーター：
　小学校で、大人が子供の味方になるということ。そうした先生方がこの中に沢山いらっしゃると思う。宮崎さん、ありがとう（拍手）。
　次に市橋さん、どんな学校でどんな活動をされたのか伺いたい。

◆市橋さん（大阪府立能勢高等学校教諭 勤務2年目）

　私は松原高校の総合学科を卒業した。松原高校では、和みの和、会話の話、輪っかの輪の「３つのWA」を大切にしており、産業社会と人間やピアカウンセラー、福祉や部落・多文化共生などのグループに分かれての人権学習と、その最終発表としての人権の集い、卒業時の課題研究など、さまざまな活動をさせていただいた。また、先生と生徒の距離感も近く、先生方には大変良くしていただいた。学級には、困難を抱える自立支援生やさまざまなバックグラウンドをもつ生徒がいたので、多様性の中で育ってきたと思っている。
　学外では大阪・関西のユネスコスクールネットワークの活動にも参加し、国立、府立、市立、私立、県立、NPO法人、海外の小中高等学校など、学校文化の異なる子供たちや多様な学校との学び合いを経験させていただいた。
　高校２年生の時には日中韓３国高校生国際会議があり、「ESDとは？」「ESDを阻害するものは？」などについて話し合い、「これからはこうしていこう」という宣言文を作った。卒業後も高校生のサポート役として参加させていただき、今も月１回程度開催されるセミナーがあり、その人たちと繋がっている。

◆永田先生
　高校時代に、他者との豊かな出会いをされていると感じた。世界的に見ても、グローバル化対応に注力する学校と、そうではない学校の二極化が懸念されている。市橋さんの場合は、多様な学校が出会えた学び舎があり、それを経験されてきたことが、もの凄い力になっていると思う。

ファシリテーター：
　市橋さん、ありがとう（拍手）。
　次に、嶋田さんにお伺いしたい。

◆嶋田さん（奈良教育大学 数学教育専修1年）

私は奈良教育大学の附属中学校で特に印象に残っている活動が二つある。一つ目は中学校１年生の時の「平和の集い」で、二つ目は韓国コンジュフセツ中学校との交流である。

まず一つ目の「平和の集い」について話したい。これは過去、先輩が提案し自主的に開催した貴重な行事で、毎年、全校生徒が参加している。私が中学校１年生の時には、講師に栗本英世さんを招いてお話を伺った。栗本さんは、長年に渡りカンボジア難民の中で生活支援や貧困を根絶するための活動などをされている。この「平和の集い」で、私はカンボジアには貧困に苦しみ、読み書きもできない子供がいることを知った。そして、世界にはどれ程このような子供がいるのかと疑問に感じ、もっと学習したいと思うようになった。

そこで、私はスーパーグローバルハイスクールに認定されている大阪府立大学大阪教育大学附属高校に進学した。この高校で世界を結ぶ「いのち」をテーマに課題研究を行い深めてきた。また、講演でボランティアのあり方についても学び、「ボランティアとは、してあげるものではなく、相手と同じ目線に立ち、対等な立場で支援者が自立できるよう共に生きる活動である」と学んだ。相手と同じ目線に立つには、まず相手と同じ視点を持つ必要があることに気付いた。そして、現地に行ってどういう状況なのかを見てみたいと思うようになり、高校の時にタイ研修旅行に参加した。実際にタイのスラム街を歩くと、物が散乱し、吐き気がするほどの匂いを放つ非衛生的な場所を見て衝撃を受けた。

二つ目に印象に残っている活動は、韓国コンジュフセツ中学校との交流がある。この活動では、韓国語、韓国の文化・企業などを学び、日本について知ってもらうためのクイズラリーなどを行なった。交流後、一部の生徒は韓国に行くというもので、この交流では二つの学びがあった。一点目は、韓国の文化を学ぶことで、相手が何を感じているのかを学び、相手の価値観を理解し、理解することで相手を知ることができたこと。韓国とは国家間の問題が多いが、この活動では活発に交流できたと思う。二点目は、国際交流の楽しさを知り、海外に興味を持つようになったこと。私はこの交流活動のホームステイには参加しなかったが、後にそれを後悔したため、高校の時に台湾の高校に１週間交換留学に行きホームステイも体験した。そこで台湾の人の温かさに触れ、台湾の文化を本当に好きになり、今は中国語を勉強している。大学生の間に短期留学に参加したいと思っている。

ファシリテーター：

嶋田さん、ありがとう（拍手）。サポートする相手と同じ目線に立ち、あるいは相手の立場を考えることが本当に大切なことだと思った。

最後になったが、中川原さんにお伺いしたい。

◆中川原さん（梅光学院大学 子ども部子ども未来学科4年）

私は大牟田市立白光中学校のユネスコスクールで学んだ。皆さん、福岡県の一番南にある大牟田市をご存知だろうか。石炭によって日本の産業をエネルギー面から支えてきた街だが、1997年の炭鉱閉鎖によって衰退し、それでも世界遺産への登録で、皆で街を盛り上げようという雰囲気になっている。大牟田市のすべての市立学校はユネスコスクールになっており、さまざまな活動を行なっている。詳しくは後方にブースが出ているので、よろしかったら後でご覧いただきたい。

私の通った中学校の近くには商店街があり、昔は人通りがあったが、今では人通りの少ない商店街となっている。この中学校で、子供自ら地域を作っていけるような学習を中心に行ってきた。特に印象に残った活動を二つご紹介したい。

まず一つ目は、修学旅行で大阪に行った際に大阪の商店街と協力して、大牟田の特産品を持参して販売したことがある。そこで私はお客さんを呼び込む係を担当した。初めは緊張して声をかけづらかったが、友達が声をかけており、私も頑張って声をかけると、大阪の人々はとても温かく、「大牟田知ってるよ」「昔住んでいたよ」と沢山の温かい言葉をいただいた。最初は自分の地元についてよく知らず、大牟田は何もない街だと思っていたが、大阪の人が「大牟田を知ってるよ」と言ってくれたことで、「大牟田はすごいんだ」と思えるようになった。

二つ目は「特産品を開発しよう」ということで、今まで作られてきたさまざまな特産品をもとに、皆で大牟田の特産品を開発した。具体的には「石炭クッキー」などがある。見た目は黒く、サクサクした食感の美味しいクッキーで、私はとても気に入っている。大牟田を思いながら、消費者にどんなものを届けたいのかも合わせて考えた。

二つの活動によって、大牟田の特徴や、大牟田をどうアピールしていくかについて考えることができた。地域は大人だけでつくるものではなく、子供も一緒につくるものだと感じた活動だった。

ファシリテーター：

地元を愛していることが伝わってきた。子供も大人も一緒に地域をつくる。子供も大人もそうやって付き合っていけるんだと思った。

◆永田先生

先ほどの宮崎さんのお話でも思ったが、本気で応援し、任せてくれる大人がいる。日本の場合、大人が「危ないから」と言って手を出して、可能性をつぶしてしまう場面が多いのではないかと時々思う。しかし、皆さんのお話を聞いていると、周りの大人が信頼して任せたという点がすごいと思う。

多くの成功談もあるが、多くの失敗談もある。それを見守っていくことがとても重要だと思う。失敗する前に止めてしまうのではなく、見守りながら、失敗しながらも若者が成長するよう見守っていく。

ファシリテーター：

中川原さん、ありがとう（拍手）。

◆永田先生

皆さんと話していると、「本当に地元が大好きなんだ」と感じる。小学生の頃から地元の大切なものや良いものを、時間をかけて知っていく。そういう教育がユネスコスクールにあると改めて思った。

ファシリテーター：

次に、皆さんが将来について、どんなことを考えているかをお聞きしたい。中川原さんから、学んできたことをどう活かし、どのようになりたいかを伺いたい。

◆中川原さん（梅光学院大学 子ども部子ども未来学科4年）

私は地元で小学校の教師になりたい。大牟田で子供たちと一緒に良い授業を作っていきたいと思ってい

る。学校が中心となり、高齢者や地域で働いている人、子供など、人と人を繋げて地域を活性化していきたい。また、自分にできることは街づくりや都市づくりだと思っているので、グローバルな視点でどんなことにも挑戦し、地元を愛するような子供たちを育てていきたいと考えている。

ファシリテーター：
素晴らしい。素敵な先生になりそうだ。
では、嶋田さんにお願いしたい。

◆嶋田さん（奈良教育大学 数学教育専修1年）
私は奈良教育大学に通っているので、将来は中学校の数学の教師になりたいと思っている。新しい学習指導要領にも記載されるほどESDを伝えることが大切になっているので、数学教育とESDによる人材開発に取り組み、世界の担い手を育てられるような教師になりたい。私の専門は数学だが、数学とESDを関連させることが非常に難しいとされている。グローバルな社会では、数学で例えると１＋１のようなすぐ答えが出るものもあれば、求めたくても答えが見つからないような課題もこの先あると思っている。しかし、そうした解決できないような難しい課題にも沢山の解決法があることも意識しながら、教師になって生徒と一緒に解決していきたい。
未来の担い手を育てる前に、私自身も大学生の間にSDGsで言われているような取組を行いたいと思っている。高校ではグローバルな言動を身につけ、世界の課題を自分のこととして考えられるようになった。自分事として考えられるようにはなったが、この先どういう活動に移していったらいいのか。解決に向けてどんな取組ができるかを大学４年間で考えていきたい。また、昨年からステップを大事にしたいと考えている。まず自分自身が学び、それを行動に移し、最終的に生徒に伝えるというステップを大事にしていきたい。持続可能な社会をつくるために、将来的に教育で解決するということを提案していきたいと思っている。

◆永田先生
グローバル化に向かう社会を学習することが大事で、時代を先取りする形で課題に取り組むというのはとても良いと思う。

ファシリテーター：
では、市橋さん。

◆市橋さん（大阪府立能勢高等学校教諭 勤務2年目）
私の勤務校は全校生徒150名ほどの小規模な能勢高校である。各学年２クラスだけではあるが、入試が機能しないのでさまざまなレベルの生徒が入学する。総合学科で学べる科目も多く、職業訓練所から国立大学に進学する生徒まで幅広い。人口減少も進み、数年前に複数の小中学校が統合されて一つになり、そこから当校に進学する子供が多い。そのため生徒たちは「初めまして」をする機会が少なく、人間関係が弱いのが課題だと感じている。だからこそ、決して偏差値が高い学校ではないが、スーパーグローバルハイスクールやユネスコスクールなど、国際的な面から生徒を外に出し、多様な環境に触れてほしいと思っている。その中で自信をもってほしいし、卒業後も自分らしく、いろんな人と生きていってほしいと思っている。

ファシリテーター：
素晴らしい。では、宮崎さん。

◆宮崎さん（東洋英和女学院大学 国際コミュニケーション学科2年）
私は皆さんと違って教師志望ではないが、学校の先生や家族に恵まれ、家族にも「自分のやりたいことには何でも挑戦していいよ」と言われてきた。大学の残り２年間、たとえジャンルは違っても興味を持ったことを勉強していきたい。
将来は、英語が好きなので英語を活かした職業に就きたいと思っている。そして、小学校で学んだ「誰かのために自分でできることをしてあげたい」という思いもある。例えば、観光客に良い思い出をつくって帰っていただきたい。形は決まってないが、「誰かのために何かをしてあげたい」という思いと、「好きな英語を活かしたい」という思いを叶える職業に就きたいと考えており、その練習として接客のアルバイトをしている。アルバイト先には各国のお客様が来られ、さまざまなニーズがあるが、一人ひとりに喜んでいただけるよう努めている。将来、希望の職業に就けるように、アルバイトなど、今できることを頑張りたい。

ファシリテーター：
自分の好きなものを活かして頑張ってほしい。では、縄手さん。

◆縄手さん（東京都立小金井北高等学校1年）
私はやりたいことが二つあり、一つは世界を繋ぐものをつくっていきたいということ。中学生の時に小学生時代の学習を活かした取組で賞をいただき、その授賞式で５年後の世界規模の大会にチャレンジすることを勧められたので、やってみたいと思っている。もう一つは、まだ高校１年生なので将来の仕事について決めたわけではないが、大学で環境学を学びたいと思っている。そして、そこで学んだことを活かして、小学校の時の活動を続けられたら良いと思っている。

ファシリテーター：
やりたいというものを育てて頑張っていただきたい。では、最後に伊藤さん。

◆伊藤さん（宮城県気仙沼高等学校2年）
今、高校２年生で東京の大学への進学を考えている。卒業後は地元で教師になりたい。大人の背中を見て、自分もそんな大人になりたいと思ったので、まずは地域貢献できる職業に就きたいと思っている。もう一つは発展途上国の人たちのための仕事に携わりたいと考えている。このように思ったのも、やはり小学３年生の時に東日本大震災で被災し、大切な家族や住まいを失うなどの状況の中で育ってきて本当に苦しみや悲しみも多かったが、ユネスコスクールでの学びや外部の方々との沢山の出会いがあり、海外の方からも沢山の支援をいただいたからだ。それが夢や希望になったりしたので、恩返しに苦しんでいる人たちのために何かしたいと考えている。人口減少などの中で、どうしたらいいかを考え、同じ地域の人の分まで、最終的には地方を創生していけるような仕事に携わりたいと思っている。
これからの時代、子供たちは答えのない社会で自分から答えを見つけたり作ったりしていかなくてはならない時代になると思う。自分もそうした問題に興味を持ち、伝えられるように経験を積み重ね、これからも頑張っていきたい。

ファシリテーター：
このパネルディスカッションで私は圧倒されっぱなしだったが、永田先生、最後に総括をお願いしたい。

◆永田先生
私も元気になった。若者が元気を与える社会が良いと思う。誤解いただきたくないのでお伝えしておく

が、彼女たちが選ばれたのは偶然である。ユネスコスクール1,100校の中から、たまたま選ばれたのが全員女性で、そのままご登壇いただいている。

皆さんに共通しているのは「とても元気だ」という点で、その元気さは大人が味方になってくれることから来ていると思った。全員が「本気で味方になってくれる大人がいるんだ」という経験をしている。徹底して耳を傾け、一緒に行動してくれる大人と出会っているという若者は、実は世の中ではそう多くはない。そうした行動をとれない大人が多い中で、皆さん、ユネスコスクールの先生方は時間をしっかりと使ってきたのではないかと思った。

国連ESD10年の最終年に共有された「あいち・なごや宣言」の第８条に、自らが関わって自らが社会を変えていく若者を育てていくという主旨の記載があるが、まさにそれを実現していく場なのかと思った。やはり大人が味方をしていくことが重要で、勇気がいることだが、彼女たちが出会っているのは個人の大人であって、決してシステムを優先していない大人である。そんな大人と出会っている若者たちだと思った。そして、小学校の頃からクリエイティブな問題解決をしていて、今でもしようとしている点がすごいと思う。

もう一つ最後になるが、「諦め」「諦念」という言葉があるように、皆さんは「ここまで来て、どうしたらいいか分からない」ということはないだろうか。先ほど「不確実性の時代を生きていくんだ」という伊藤さんから力強い言葉があり、さらに「問題解決の糸口を見つけていくんだ」という意志が強く感じられた。そうした中で、皆さんには、問題を生み出している一部ではなく、問題解決の一部だという自覚があると思う。

実はこれはユネスコスクールの運動を戦後担ってきた韓国のユネスコ本部職員の方から伺った言葉である。その方から「ユネスコスクールの子供たちは何が違うのか、永田さん分かるか？」と聞かれたことがあり、答えを聞くと「自分が問題の一部、問題を生み出している一部や側ではなくて、問題解決の一部だということに自覚があることだ」とはっきり答えられた。まさにそういうことだと思う。今日のお話に、私も元気をいただいたが、それは、たぶんそういうことなのだろう。皆さんが問題解決を企画され、その礎がユネスコスクールにあるということ。是非これからもよろしくお願いしたい。

ファシリテーター：

本日はユネスコスクール卒業生の方々と永田先生に心より感謝申し上げたい。この貴重な時間の中で、皆さんの素晴らしいストーリーを共有できたことで、ユネスコスクールの教育活動がここに集結して現れたと感じた。私は今日、皆さんの方が未来を見据えていると感じ、皆さんについていきたいと思った。今後の社会や世界を担っていかれる皆さんなので頑張っていただきたい。

分科会「喫緊の課題と ESD」

第１分科会　【ワークショップ】ユネスコスクールならではの気候変動アクション

ファシリテーター　聖心女子大学文学部教育学科　教授　永田　佳之

近年、ESDの一環として積極的に推進されるようになった「気候変動教育」を学校全体で取り組むにはどうすれば良いのかについて、ワークシートを用いながらグループで考えた。前半では、海外のESD優良実践校における気候変動学習や学校全体（ホールスクール）による取組やユネスコの枠組を紹介し、後半はグループごとに気候変動教育に学校全体で挑むアクション・プランを作成した。

授業で気候変動という地球規模課題を教えるだけではなく、学校全体でいかにチャレンジができるのかについて実にユニークなアイデアや実践が共有された賑やかな分科会だった。

第２分科会　【ワークショップ】ESD ／ SDGs を学ぶための教材をどう作成するか

ファシリテーター　東京都市大学環境学部　教授　佐藤　真久
東京都市大学　特任准教授　伊藤　通子

本分科会は、ESD/SDGsの学びに資する教材（以下、ESD/SDGs関連教材）と関連学習プログラムについて、多様な教材と取組事例の共有、教材の活用方策についての議論を深めるものであった。本分科会は、ESD/SDGs関連教材の開発と学習プログラムの実施に先進的に関わる、グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）、日本環境教育フォーラム（JEEF）、Think the Earth、開発教育協会（DEAR）、国際協力機構（JICA）、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の協力の下で開催された。分科会募集枠に、150名以上の応募があり、急遽、２教室での分科会開催となった。

当日の分科会では、開発されたESD/SDGs関連教材を学校現場においてどのように活用できるか、ESD/SDGs関連教材を作るには何に配慮をすればいいのか、ESD/SDGs関連教材を効果的に活かすことのできる学習プログラムとはどのようなものか、について経験に基づく紹介が行われ、自身の学校における実践にむけたノウハウの共有や、今後の実施にむけた情報交流が行われた。

第３分科会　【ワークショップ】ESD の視点で教員の働き方を見直そう

ファシリテーター　神奈川県横浜市立日枝小学校　校長　住田　昌治

「ESDで働き方改革?何の関係があるの?」こんな声が聞こえてきそうな雰囲気とコーヒーの香りが漂う中で、ワークショップを中心に進めた。そもそもESDは、これまでの教育の在り方を見直し、再方向付けするところに意味がある。授業で表面的なことだけを繕ったって深い次元での変容は生まれない。ESDの10年の反省に立ってホールスクールアプローチが導入され、先進校では実践されている。未だにESDの授業はどうすればいいのか狭い理解の中で論じているようでは時代遅れも甚だしい。中教審答申には、「教師が日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになる」と書かれている。教職員の働き方も質の高い教育活動に大きな影響を与えるものである。持続可能な社会は持続可能な学校が中心になって創るのであり、持続可能な学校は持続可能な教職員が創るのである。持続可能な働き方にするためのキーワードは、「寝食を忘れて働かない」だ。

未来を創る教育ESDは、今までの教育を否定するのではなく、日々の営みの結果が現在の状況を生み出しているという認識が欠かせない。そう考えると、未来を持続可能な社会にするためには、私たちの日々の主体的な営み・選択がなければならない。

ホールスクールアプローチで進めるESDで、学校を持続可能にしていきましょう。

第４分科会　【ワークショップ】多文化理解・多文化共生をどう進めるか

ファシリテーター　東海大学教養学部国際学科　教授　小貫　大輔

キーワードは「多文化共修」。「異なった文化」について勉強するのではなく、「様々な文化背景」をもつ人たちが一緒に学ぶ形を考えてみよう、という趣旨の会であった。東海大学のUNESCOユースチームや留学生に手伝ってもらい、文化や言語の違う人との出会いを体験。総勢70名ほどの参加者が、まずはゲームで丸く輪になった後、対面にいる人とペアを組んで世界の挨拶を体験した。カタールからの留学生が紹介した「鼻のキス」はチャレンジであった。会場の雰囲気が柔らかくなった後、小グループに分かれてそれぞれの「多文化」への思いや取組を共有。ペルーとパキスタンのハーフとして日本で育った大学生は、偏見にあって辛かった子供時代と、それを乗り越えて後輩のために活動するきっかけとなった多文化セミナーの思い出をシェアしてくれた。有馬高校からは、近隣のイスラム系インターナショナルスクールとの出会いと、その後の交流について発表があった。

第５分科会　【ワークショップ】学校と地域をどうつなげるか

司会　ESD 活動支援センター　次長　柴尾　智子
発表　伊豆半島ジオパーク推進協議会　専任研究員　鈴木　雄介
　　福島県只見町立明和小学校　教諭　薄　陽太

地域の持続可能性と教育・学びを重視しているユネスコのプログラムであるユネスコ世界ジオパーク地域、ユネスコエコパーク地域から実践発表があった。

⑴地域の立場として鈴木氏からは「地域の自然と人のかかわりを知る学習とは」をテーマに、その地域特有の地形や環境、自然災害と深いかかわりをもつ大地の成り立ちに立ち返りつつ、地域の資源と未来を学び考え、地域発展に貢献しようとする教育活動についての発表。

⑵学校の立場として薄氏からは「地域を知り、地域や社会の持続発展に寄与する学習活動」をテーマに、知ることから誇りと愛着につなげ、よりよい地域を創り出そうとする「ESD只見学」を根幹として地方行政や地域と協働する教育活動（①ブナ林・雪・自然災害など自然に関わる学習、②伝統芸能・つる細工など文化に関わる学習）についての発表。

その後のグループワークでは、①実践発表から得られたヒント、②自身の経験からの提案、③学校と地域をつなげる「ミソ・キモ・秘訣」、④学校・地域それぞれが留意すべき点などについて、小グループで意見交換し、成果発表を行った。

第６分科会　【テーマ別交流研修会】ユネスコスクールが行う海外連携・協働学習 ～海外と日本の事例から学ぶ～

司会　玉川大学　教授　小林　亮
　　神奈川県ユネスコスクール連絡協議会　事務局長　望月　浩明
発表　韓国ユネスコ国内委員会　シニア・プログラム・スペシャリスト　イム・ション
　　宮城県大崎市立大貫小学校　教諭　大槻　ひろ恵
　　神奈川県立有馬高等学校　教諭　半澤　ゆかり
　　大阪関西ユネスコスクールネットワーク　大阪教育大学附属高校池田校舎　教諭　治部　浩三

「日本のユネスコスクールが海外ユネスコスクールと持続的･継続的に協力･協働関係を築くためには」という内容のテーマで国内外の関係者から報告をいただいた。

韓国ユネスコ国内委員会からは韓国ユネスコスクールの活動、国際交流プログラムのレインボー・プロジェクト、日韓教職員派遣事業などの報告があった。

大貫小学校からは地域の人材の力を借り、できる範囲でできることを日頃の学習を活かしつつ実施しているとの報告。有馬高校からは言葉の壁、時差、通信手段、費用の捻出などの課題が海外交流の課題であるとの指摘があった。大阪関西ASPネットからは生徒たちが主体になり国際的なフォーラムを運営、そうした活動を通し、身近な課題を深く学び、そこから広い学びに繋がり、再び自分たちの生活を振り返るかたちの学びが生まれている旨の報告があった。

４名の報告を受け、ザビーネ・デッツェル（ユネスコ本部ユネスコスクール国際コーディネーター）からの講評では、より海外連携を進めて行くにあたり、OTA（ユネスコ本部が運営する世界的なユネスコスクールオンラインプラットホーム）が活用できる旨の提言があった。

第７分科会　【テーマ別交流研修会】ホールスクールアプローチで学校をデザインしよう

司会　宮城教育大学教授　市瀬　智紀
発表　広島県福山市立福山中・高等学校　教諭　上山　晋平
東京都杉並区立西田小学校　副校長　新井　雅晶
コーディネーター　公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

ACCUが文部科学省委託事業（平成30年度は補助金事業）として３年間実施してきたホールスクールアプローチによるESD実践を支援するプロジェクトの参加校「サステイナブルスクール」より、杉並区立西田小学校、福山市立福山中・高等学校の２校が、どのようにホールスクールアプローチを展開し、それらの取組を通して何が変わったかについて報告した。

参加者からは、教員の異動や教員間の関心度合いの差によりESDが学校全体へ浸透することの難しさについて質問が上がった。両校からは、むしろその事実を前提としつつ、教員全員が参加するワークショップを開催したり、研究紀要を共同で作成し成果を可視化したりするなどの具体的な工夫が共有された。

司会の市瀬智紀教授は、ESDカレンダーを展開することの意味や、「深い学び」の実現など、ホールスクールアプローチを学校で展開することによるメリットについて言及された。

第８分科会　【テーマ別交流研修会】ESD による教育効果をどう測るか

発表　東京都多摩市立連光寺小学校　校長　棚橋　乾
東京都多摩市立連光寺小学校　研究主任　松田　一枝
司会　元東京都江東区立八名川小学校長、日本 ESD 学会副会長　手島　利夫

学校ESDの評価で重視したいこととして、⑴活動は児童・生徒が主体的で協働的な問題解決学習になっていたか　⑵持続可能な社会づくりの価値観は育成できたか　⑶持続可能な社会づくりのための能力・態度は育成できたかを掲げ、評価の在り方については、①指導者が行う学習評価　②学習者が行う自己評価　③教育課程の評価という３つの視点から実践の発表があった。その後、①～③の順に、時間を区切りながら４～５名のグループ討議を行い、各グループ毎の話題や討議内容を全体で共有した。評価規準や方法を学校として設定すること、それは汎用的な能力や心情・態度であること。ルーブリックやポートフォリオの活用、活動の様子、意識調査などから多面的にとらえ、全てを指導の改善や児童・生徒の成長に役立てることを軸に話し合いが深まった。

第９分科会　【テーマ別交流研修会】どうやって周りを巻き込むか？ ～ESD リーダー像を考える～

司会　（公財）五井平和財団 /ESD 日本ユースコンファレンス事務局　中並　千景
（公財）五井平和財団 /ESD 日本ユースコンファレンス事務局　鈴木　啓介
発表　名古屋国際中学校・高等学校　教諭　内藤　圭祐
和歌山県橋本市立あやの台小学校　教諭　中谷　栄作
認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレンジャパン　子ども活動応援事業マネージャー　伊藤菜々美

『ESD日本ユース』として活動する３人のユースが学校内、地域、NPO･NGOの３つの連携について事例を発表。後半では小グループで参加者同士が感想などの共有をし、参加者自らが考える「ESDリーダー像」について付箋を用いて発表した。

①学校内での連携/内藤圭祐

ユネスコスクール認定当初から様々な試行錯誤をし、他の教職員を巻き込み、校内体制を整えた経験について、「コンクールなどで外部評価を得て、学校内の評価を高め、さまざまな行事や授業にESDを盛り込んでいく。」などの具体例を挙げながら発表。

②地域との連携/中谷栄作

保護者・自治会・地元商店など、地域の大人に積極的に声を掛け、みながWin-Winとなるよう心がける連携について、防災キャンプなどの実例を挙げつつ、「３サイクル」で行う１年間の流れを発表。

③NPO･NGOとの連携/伊藤菜々美

全国各地の学校で取り組まれており、固定観念に囚われず「子供の可能性」を第一に信じて行う、さまざまなテーマのプログラムでは、子供たちの心に火がつき、世の中に対する意識も自然と変わる実践例を発表。

第 10 分科会　【テーマ別交流研修会】ESD と防災

司会　東京都多摩市立青陵中学校　校長　千葉　正法
発表　宮城県立多賀城高等学校　校長　佐々木克敬

まず、東日本大震災時の実際の映像で、都市型津波の特徴である「縮流」や「合流」による甚大な波力とそれにより多くの被害が発生した教訓を学んだ。

こうした経験が、スーパーサイエンススクール、イノベーションスクール、ユネスコスクールである多賀城高校のこれまでの防災・減災学習や災害科学科設立の契機、教育充実の礎となった。またESDの中核として普通科と災害科学科の共通科目の「くらしと安全A」「情報と災害」の他に「ボランティア活動」などが位置付けられ、災害科学科には防災専門系として「自然科学と災害」「社会と災害」「科学技術と災害」など多彩な科目がある。

そして、震災を「未来に」「世界に」伝える学習活動が「防災学習」「自然科学学習」「国際理解学習」などを通じて国内外の教育資源と連携･協力の下で行われている。これらが「通学防災マップの作成」「津波波高標識設置活動」「東日本震災メモリアday」「被災地案内国際ボランティア」などとして防災・減災・備災などの考え方を育むとともに、生徒の実践として結実させている様子などが報告され、参加者相互の意見や実践交流も活発に行われた。

第 11 分科会　【テーマ別交流研修会】横浜の児童生徒が考える SDGs

司会　横浜市教育委員会事務局指導部指導企画課　主任指導主事　鈴木　康史

ユネスコスクール４校と会場校の子供34名が、「SDGsで一番大切なもの、次に大切な４つ」を選んで参加した。「SDGsがめざしている2030年の未来の姿」をテーマに、合意形成のための思考ツールである「ダイヤモンド・ランキング」を活用して、グループごとに話し合いを行った。その後、話し合った成果をワールドカフェ形式で共有し、参加者からアドバイスをいただいた。その後、参加者が子供たちの話し合いをもとに、ESDについて考えた。参加者からは、「年齢が違う子供たちが自分の言葉で語る姿がすばらしかった。たくさんあるSDGsの目標を理解するためにも、この手法は有効だと思った。」や、「世界で実際に問題となっている事例に注目したり、自分たちにできることは何かという視点に立って考えたりする子が多くて驚いた。子供たちがもっている輝きや力を引き出すことは、教員がESD、SDGsとの結び付きを学校教育の中で創作していくことが大切だと感じた。」などの感想があった。

ユネスコスクールによるポスター展示（実践報告）

横浜展示

ランチョンセッション（協力企業・団体による社会貢献活動紹介）

NPO 法人いのちの教室／協賛：カシオ計算機株式会社　～「いのちの授業」

「いのちの授業」は、２年前まで勤務していたカシオ計算機で立ち上げた授業である。うつに悩む社員に寄り添い命を助ける活動が土台になっている。社会には、紛争、貧困、人権などの問題、子供の社会でもいじめ、不登校、自殺など、多くの問題があるが、全てのテーマに共通するのが命である。子供たちに向けて生きる意味を直接語っていこうと考え、この出前授業を始めた。

授業では、①本気で伝えるということ、②子供たちが自ら考え参加する場を作るということ、②頭で理解させるのではなく、心で触れて感じさせるということ、この３つを大切にしている。

今までに約74,000人の子供たちに出会ってきたが、小学３年生に「どうせ死ぬ人間がどうして生きる意味があるのか」と質問をされたことがある。90分かけて一緒に命について考え、授業を終えると「今を生きることが大事だと分かった」と言ってくれた。

約4,000人から手紙をいただき、そのうち約200人が命を絶とうとしていた。この授業で助けられる命があるなら、これからも取組を継続していきたい。大人は、子供たちが子供たち自身で生きることができる社会、そういう社会を作っていかなければならないと思っている。

発表者：若尾 久（NPO法人いのちの教室　理事長）

コカ･コーラ ボトラーズジャパン株式会社　～清涼飲料水メーカーとしての取組

コカ･コーラ ボトラーズジャパンでは「共創価値（CSV）」の実現を経営の根幹として、「健康」「環境」「コミュニティ」を優先課題に位置づけ、さまざまな取組を進めている。

具体的には、清涼飲料水メーカーとして人々の健康に貢献するため、各種セミナーを開催している。近年は熱中症予防を目的とした「水分補給セミナー」への要望が増え、2018年には学校や各種団体・企業を対象に計35回開催し、約7,000人にご参加いただいた。また、多様な清涼飲料水の紹介と飲み物の選び方を伝えるために、４工場で「飲育（いんいく）セミナー」を開催し、小学生と保護者約1,600人にご参加いただいた。

水を利用してビジネスを行う企業としては、工場の水使用量削減と再利用を進めるとともに、使用した水を自然界に還元する取組を推進し、水源の森では子供たちを対象に環境プログラムを定期的に開催して水資源保護の重要性への理解を深めている。また、日本のコカ･コーラシステムでは、限りある資源を有効利用する取組として容器包装の軽量化を1970年代より進めているが、2018年には「容器の2030年ビジョン」を発表し、廃棄物ゼロ社会の実現を目指している。

その他、自動販売機を通じて、災害対応、地域活性、スポーツ振興、福祉支援などの支援活動を行っている。

今後も地域の人々の活動的で健康的なライフスタイルを広く提案していきたいと考えている。

発表者：品田 小百合（コカ･コーラ ボトラーズジャパン株式会社　CSV推進部CSV企画課）

株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー　～「“届けよう、服のチカラ” プロジェクト」

“届けよう、服のチカラ” プロジェクトは、ユニクロ・ジーユーが行う「全商品リサイクル活動」の学校版で、全国の小・中・高等学校で児童・生徒が中心となって実施する子供服の回収プロジェクトである。回収した衣料は主に、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じて、世界中の難民の半数を占める18歳未満の子供たちのもとへ届けている。

本プロジェクトの流れは、まず従業員が学校を訪問し、服のもつチカラや寄贈先である難民・避難民の状況について出張授業を行った後、児童・生徒がオリジナルの回収箱などを作成して校内や地域によびかけ、衣料を回収する。活動終了時には、難民キャンプなどへの衣料寄贈のレポートを共有し、学校での振り返りや協力してくれた方への報告に役立てていただいている。2018年度には、全国の小中高388校、約４万人の児童・生徒がプロジェクトに参加した。その中には、ユネスコスクールも73校含まれている。

児童・生徒からの感想では「難民の子供たちに少しでも笑顔を、元気を届けてあげられたらいいと思いました」など、また先生方からは「リサイクルという身近なレベルのことを通して、難民問題、国際情勢に目を向ける良いきっかけになった」「回収に向けてグループで作業することで生徒に責任感や協調性が芽生え、地域と連携する機会を得られた」などの感想をいただいている。2019年度の募集は、WEBサイトにて２月から開始、４月19日まで受け付ける。

発表者：中野 友華（株式会社ファーストリテイリング　サステナビリティ部）

第９回ESD大賞表彰式

１. 受賞校の発表

文部科学大臣賞　　：宮城県気仙沼高等学校
ユネスコスクール最優秀賞：宮城県多賀城高等学校
小学校賞　　：徳島県上板町立高志小学校
中学校賞　　：大阪府寝屋川市立第十中学校
高等学校賞　　：和歌山県立田辺高等学校
ベスト・アクティビティ賞：三重中学校・高等学校
スタートアップ賞　　：神奈川県横浜市立日枝小学校

ESDの一層の普及を図るため、昨年度から「ベスト・アクティビティ賞」と「スタートアップ賞」の２賞を設けた。ベスト・アクティビティ賞は、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他の学校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校に贈られ、スタートアップ賞は、ユネスコスクールに登録して３年未満で優れた実践を行う学校に贈られる。また、本年度の副賞はカシオ計算機株式会社にご協力いただいた。

２. 各賞の講評

◆佐野　金吾（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、ESD大賞審査委員長）
各受賞校の講評は、別冊「第９回ESD大賞実践集」参照。

３. 各賞授与

◆文部科学大臣賞
賞状・副賞授与：大山 真未（文部科学省国際統括官）
◆ユネスコスクール最優秀賞、他
賞状授与　　：佐野 金吾（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、ESD大賞審査委員長）
副賞授与　　：木村 則昭（ESG統轄部サステナビリティ推進部社会環境企画室室長）

４. 受賞校代表挨拶

◆小山 淳（宮城県気仙沼高等学校校長）

受賞校を代表してご挨拶申し上げたい。本校は東日本大震災の被災地、気仙沼にあることから、これまで皆様から賜ったご支援に対して、まずは心からの感謝をお伝えしたい。

本校は今年４月、隣接する普通科の高等学校と統合した。戦後最大といわれる教育改革の最中に震災を体験し、学校として新たな歩みを始めなければいけない境遇での統合であったため想いを結集することとなった。中核に据えた概念・価値は、これまで気仙沼市全体で進めきたESDである。新たにESDによる未来を生きる学力づくりに取り組み始めたのは３年前だったが、この度、本校の伊藤さんはじめ、気仙沼の子供たちのこれまでの努力に対して栄えある賞を頂戴したことは、大きな喜びであるとともに今後の大きな糧になると感謝している。

第10回大会記念　ユネスコスクール／ESD推進功労賞表彰式

第10回全国大会を記念して、長年の間、ESDの普及啓発にユネスコスクールの精神的、継続的な成果をあげ、また、学校教育をはじめ様々な未来への取組、ESDの向上発展に貢献することにより、我が国の持続可能な社会を構築する人材の育成に特にご尽力いただいた方に対し、日本ユネスコ国内委員会会長賞を贈る。

１. 受賞者の発表

◆ユネスコスクールの教職員として、ESD振興に関し特に功績顕著な者
・手島 利夫（元東京都江東区立八名川小学校長、日本ESD学会副会長）
受賞理由 ：ESDカレンダーの発案、二度のESD大賞受賞、ESD全国普及などの顕著な功績
・及川 幸彦（東京大学主幹研究員、元宮城県気仙沼市教育委員会副参事）
受賞理由 ：学校現場を中心としたESDの全国普及に長年にわたり顕著な功績
・伊井 直比呂（大阪府立大学教授、大阪（関西）ユネスコスクールネットワーク事務局長、元大阪教育大学附属高等学校池田校舎教諭）
受賞理由 ：ユネスコスクール黎明期から現在まで長年にわたり顕著な功績

◆自治体の職員として、ESD振興に関し特に功績顕著な者
・清水 哲也（東京都多摩市教育委員会教育長）
受賞理由 ：多摩市のESDを長年牽引し、第5回ユネスコスクール全国大会を開催。
・安田 昌則（福岡県大牟田市教育委員会教育長）
受賞理由 ：自治体モデルとして全国的な影響力をもつ大牟田市にてESDを牽引し、第９回大会を開催。

◆大学及び研究機関などの教職員として、ESD振興に関し特に功績顕著な者
・見上 一幸（元宮城教育大学学長、元日本ユネスコ国内委員会委員）
受賞理由 ：ASPUnivNetの設立をはじめ、大学によるユネスコスクール/ESDの全国的な普及に貢献。
・長友 恒人（元奈良教育大学学長、日本ESD学会長）
受賞理由 ：大学による学校現場でのESDの普及、特に教員養成の分野で長年にわたる功績。

◆公益法人・NPOおよび民間団体・企業として、ESD振興に特に功績顕著な者
・一般財団法人ジャパンアートマイル
受賞理由 ：ユネスコスクールの国際交流・協働を長年にわたり支援。
・株式会社三菱UFJ銀行
受賞理由 ：ユネスコスクールへの助成金やユネスコスクールプレート供与など、日本ユネスコ協会連盟を通じた長年にわたる支援。

２. 各賞授与

賞状授与：大山 真未（文部科学省国際統括官）
副賞授与：嘉納 未來（ネスレ日本株式会社執行役員、コーポレートアフェアーズ統括部長）

３．コメント

◆嘉納 未來（ネスレ日本株式会社執行役員、コーポレートアフェアーズ統括部長）

記念すべき第10回大会において功労賞を受賞された皆様にまずはお祝いを申し上げたい。

ネスレは世界中で社会課題を解決すべく活動を行っている。その一環として、子供たちの健康づくりのために、「ヘルシーキッズプログラム」を80カ国で展開してきた。日本でも、これまで9,300校余りの小中学校、80万人の子供たちが弊社の教育プログラムに関わっている。そうした中で、弊社も賛同するこのESDにどのような形で貢献できるかと考え、例えば、ヘルシーキッズプログラム賞や、本日受賞された皆様への賞を提供させていただいた。

まさに今、企業でもESDに貢献すべく「どういう形で実際に進めていくのか」という議論が活発になっており、日頃からESDはそうした意味で夢のある長期的な教育だと賛同している。ESDの実践に尽力されている皆様に敬意を表するとともに、この取組を通じて、一人でも多くの子供たちが持続可能な社会づくりの担い手となって活躍していくことを願っている。

閉　会　式

閉会挨拶

◆木曽 功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）

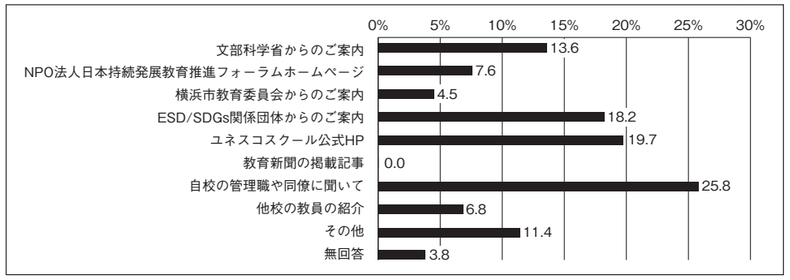
2007年に文部科学省国際統括官および日本ユネスコ国内委員会の職務に就き、初めてESDという新しい教育の考え方に触れた。当時、50年以上前から日本にあった「ユネスコスクール」とESDをリンクさせたらどうかという話になり、国内に23校しかなかったユネスコスクールを500校つくろうという目標を掲げて取組を開始した。かつては「ユネスコ協同学校」と呼ばれていた時期もあったが、「ユネスコスクール」に改称して今に至る。13年後の今、加盟校は1,100校を超え、本当に感慨深く嬉しく思っている。先生方一人ひとりに支えられ、ここまで来ることができた。

ESDやサステナビリティの可能性は、21世紀の日本人だけでなく世界が直面するまさに大きな課題である。どうすれば持続可能な安定した平和な社会を築けるかに原点に置き、日本の教育、あるいは世界の教育を見直す時期に来ているのではないか。この方向で教育が見直されていく過程にあると思っている。

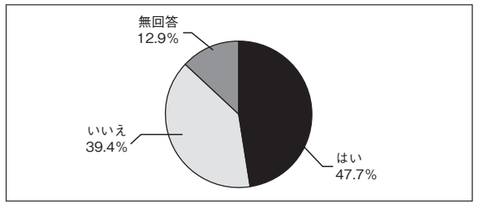
最後に、関係者の皆様に心より感謝申し上げるとともに、来年また大会でお会いできることを願ってご挨拶とさせていただきたい。

アンケート結果

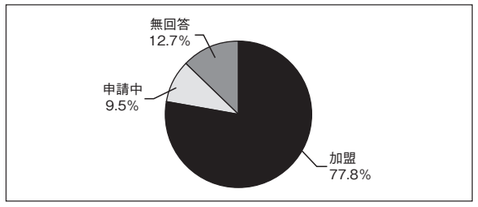
Q1　大会認知経路（複数回答可）　n=132



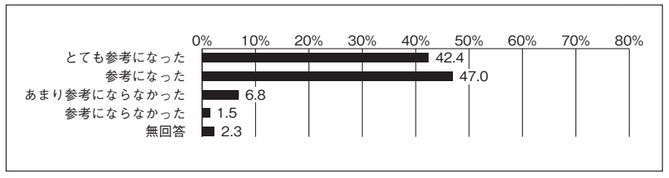
Q2　ユネスコスクール加盟校ですか　n=132



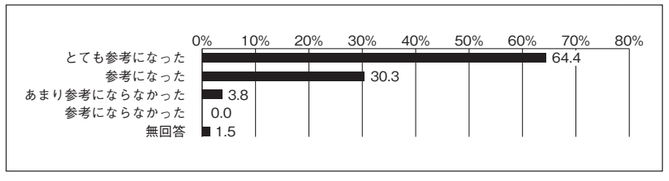
（ユネスコスクール加盟校の方に）
Q2SQ　ユネスコスクール加盟・申請中の内訳　n=63



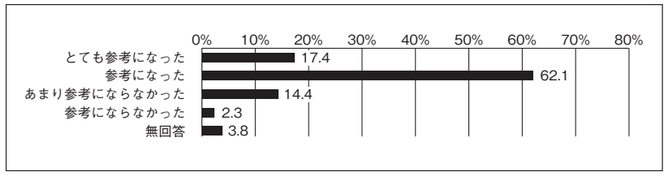
Q3-2　特別対談・参考度　n=132



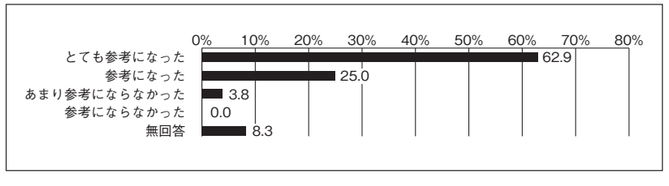
Q3-3　パネルディスカッション・参考度　n=132



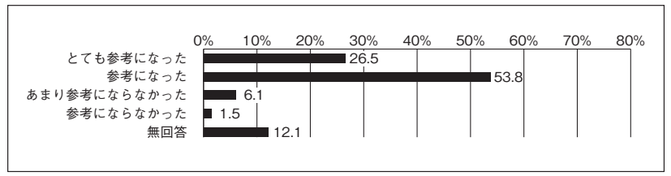
Q3-4　ランチョンセッション・参考度　n=132



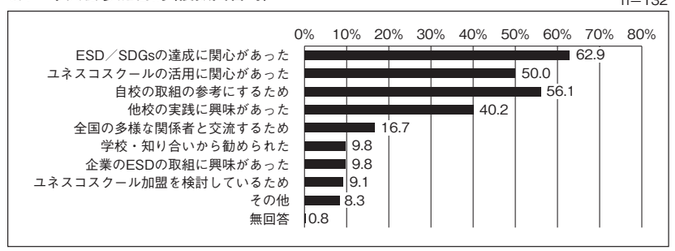
Q3-5　分科会・参考度　n=132



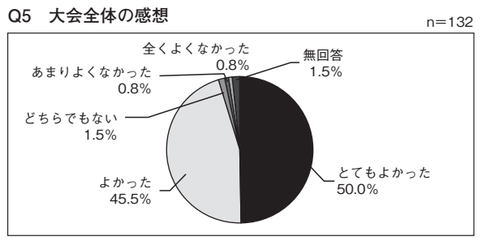
Q3-7　ESD 展示ブース・参考度



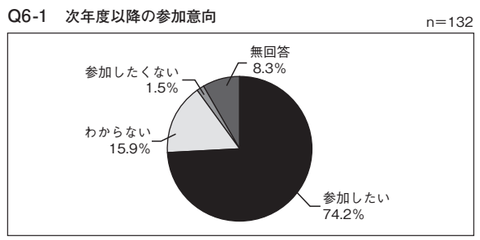
Q4　本大会参加目的（複数回答可）



Q5　大会全体の感想



Q6-1　次年度以降の参加意向



協力企業一覧（50音順）

オムロンヘルスケア株式会社
カシオ計算機株式会社
コカ･コーラ ボトラーズジャパン株式会社
ネスレ日本株式会社
株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー

展示団体一覧（50音順）

ESD活動支援センター
ESDコンソーシアム愛知
ESD日本ユースコンファレンス／公益財団法人五井平和財団
NPO法人いのちの教室
大牟田市教育委員会
近畿ESDコンソーシアム
一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）
独立行政法人国際協力機構
資源と環境の教育を考える会「エコが見える学校」
一般財団法人ジャパンアートマイル
信州ESDコンソーシアム
一般社団法人全国農協観光協会
日本ESD学会
特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク
日本ユネスコエコパークネットワーク
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
広島ESDコンソーシアム
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
横浜市ESD推進コンソーシアム

第10回ユネスコスクール全国大会
持続可能な開発のための教育（ESD）研究大会
プログラム

発行日：平成31年３月７日
発　行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
http://www.jp-esd.org/
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町１－40
電話 03－3295－7051
ＦＡＸ 03－3295－7054
E-mail:info@jp-esd.org